明珠
龍泉院
参禅会会報

69

平成30年4月8日

従容録に学ぶ（六一）

第三十一則　雲門露柱

〔示　衆〕

衆に示して云く、向上の一機は、鶴が霄漢に沖れ、當陽の一路は、鷂が新羅を過ぐるがごとし。直饒、眼が流星く似くなるも、未だ口は匾擔の如くなるを免れず。且道、是れは何の宗旨ぞ？

〔本　則〕

挙ぐ、雲門、垂語して云く、「古佛も露柱と相交せるは、是れ第幾機？」（七に落ち八に落ち了り。）衆、語なし。（却って露柱と同参す。）自ら代って云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下らす。」（張翁、酒を喫めば、李翁、酔う。）

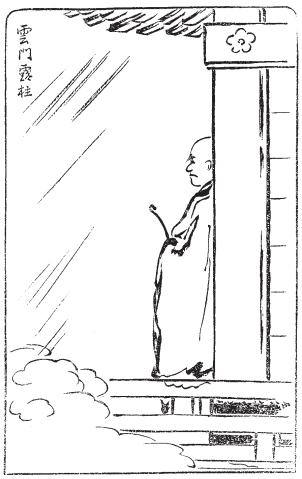
『従容録』百則の一々は、もともと長短マチマチの文体であります。じつは、紙幅の都合によって、これまではちょうど適当な長さのものを優先してとりあげてきましたので、必然的に極端に長短な則がたくさん残ってしまいました。もう六〇則を超え、長短などをいってはいられません。今回は、たいへん短い一則。ごらんのとおり、雲門さんが主人公であります。

『従容録』には雲門さんが主人公の則は一三ぐらいもあり、ダントツで多いのです。各〔本則〕を編集した宏智さんが、とくに雲門さんを敬慕していたわけでもないでしょうが、雲門さんの言動が公案になるものが多かったのは事実ですね。

雲門文偃（八六九～九四九）は、禅宗五家の一つ、雲門宗の開祖とされる禅匠です。今回はこの方による古仏（＝高僧）と露柱との関わりがテーマ。「露柱」とは柱のことです。屋内の木の柱ではなく、唐代ですから石柱です。日本人が画いた挿絵では木柱なのは誤り。つまり、この則は無性・無生物の石柱と高僧との交流という面白いテーマですね。

まず万松さんがこの公案の主旨を示した〔示衆〕を、例によって意訳してみましょう。

仏の境涯を究め尽くした人の大力量は、ツルが大空に



高く飛び上がって跡をとどめぬようなもの。目前の大道は、タカがサッと風のように早く新羅国を過ぎ去るようで、影さえ見せぬ。このように肉眼ではとらえようがないから、それを言葉で示すことはできぬ。さてさて、これはどんな宗旨かな？

こんなところ。むつかしい字句では、「新羅」は唐代には遠国の代名詞。「当陽」はまったく私のないところ。「匾擔」はテンビン棒→口を閉じた形→モノいわぬこと。表現できない主旨をのべてみよ、といわれても困りますね。そこで、つぎの〔本則〕をみます。

雲門が雲水たちを誘発してのべた。「古仏たちが石柱と交流したのは、どんなはたらきだったろうな？」みな答えられず黙っていたので、みずから代わっていってあげた。「南山に雲が起れば、北山に雨が降るさ。」

イヤー、むつかしい、だから禅はわからん、といったらもうおしまいです。そう、常識的な知識や理解ではダメなのです。わたくしたちは、人間と無生物とは交流などできない、と思っていますね。これが常識。たしかに、〝常識〟は日常生活の上では大切な生活のハタラキであり、それを欠くと〝非常識〟とされ、対人関係はほころびます。はては、「あいつは変わり者だ」とレッテルを張られ、人に相手にされなくなります。わたくしたちの生きる営みは、つまるところ他とのコミュニケーションですから、非常識な生きざまはおのれ自身を破滅させるのがオチであります。

雲門山雲門寺の鼓桜

ところが、悟りの世界に生きるすぐれた方がたは、しばしば常識の世界から脱せよ、常識を打破せよ、と教え示すのです。こうした姿勢と右の人間関係とはいったい矛盾しないのでしょうか。それは、こういったことなのです。禅の悟りの境地に立つとは、あくまで、おのれの歩みの中にそうしたすばらしい風光をみいだしている人のあり方なのですが、そういう歩みの人からいう常識打破とは、ふつうの思いや分別に生きている人の世界と、同じ土俵に立った言動ではありません。禅は根本的な立場や見方がちがうのです。つまり、古仏と露柱はけっして対立するものではなく、根本的なイノチのはたらき、という世界からは同じモノだという見方であります。それぞれが、それぞれの時処位においては、立派に存在し、ハタラキを示している点では同じ！

これは、仏心や仏性といった世界であります。その世界では、古仏が語れば露柱が聴き、露柱が語れば古仏が聴くという、無情と有情との交流や交感はもちろんのこと、南山に雲がわき起ると、遠くの北山のほうで雨が降るという、無情物同志の妙なるハタラキさえもごく自然に行われるのです。私たちの坐禅こそは、まさにそうしたマッサラな天地のハタラキを見聞することができるものであります。

作務あれこれ

継続は力なり

柏市　松井　隆

始めた動機

平成二一年四月の降誕会の時、丁度、参道の躑躅が咲き誇る頃だったと思います。椎名老師に「躑躅を剪定する作務にトライしたいが、如何でしょうか」と尋ねたところ、「是非やってもらおうか」と、お許しをいただき、奉仕作務を始めることになりました。

相棒は一緒に典座をする小山さんです。私も丁度、趣味として〔庭木と果樹の手入れ講座〕通信教育コースを修了したばかりで、知り合いの庭を手入れさせていただいたこともあって、龍泉院で実践体験できるのはグットタイミングでした。そして、毎月第一、第三金曜と第二土曜の三回行うことになりました。早いものでそれから今年四月で九年にもなります。

木々との対峙

始めてみるとなかなか大変でしたが、季節に応じた木々との出会いが何よりの醍醐味です。春には参道から本堂に掛けて躑躅の剪定、玉柘植と堂壇躑躅の玉仕上げ、「夏も近づく八八夜」のころには五葉松の新芽摘みを行います。六月に入ると数百株もある紫陽花が一斉に咲き誇り、七、八月は花後の剪定と続きます。どれも根気のいる作業です。

八月は百日紅が赤い花をつけ、花後の剪定は落葉した一〇、一一月に行います。その他、山茶花、沙羅、松、梅、椿、アセビなど多くの木と向き合い、「隣の木の影は嫌だ」、「もう少し風通しを良くしてくれよ」、「虎刈りは嫌だ。恰好よくしてよ」とそれぞれの呟きが伝わってくるようです。そして「果たしてこのような作務で良いのか」と自問しながら続けてきました。

ここまで続けられたのは、椎名老師の松や梅などの剪定のお姿によるものです。年季に溢れ、「修行は坐禅だけではない。作務もあるよ」、「論より実践だ」など修証への励ましがあってのことだと思います。

サンガの園に

お釈迦様を取りまく集団がサンガ（僧伽）なら、龍泉院参禅会もまたサンガ。椎名老師のご指導の下に坐禅堂を建立し、佐々木宏幹先生が『明珠』創刊五〇号でお示しいただいた「禅の力」が会員に少しずつ湧いてきたのではないかと思います。

龍泉院の広い園内を作務の行によって、木の剪定だけではなく、坐禅堂の清掃、夏の草取り、坐禅堂の裏山での竹林整備など。それぞれのチームが自然に、自主的に編成され、季節それぞれの美しい園が観賞できるようになってきました。

一〇時のお茶タイムでは椎名老師を囲んで作務の皆さんと歓談し、夏の暑いときには大黒様が浸けられた甘露梅ジュースをいただいています。これが龍泉院でのサンガであり、醍醐味なのです。

九年にもなると、作務メンバーがどんどんと増えてきました。メンバーには代表幹事の小畑さんを先頭に、相澤さんとたまには奥様、永野さん、五十嵐さん、小畑二郎さん、河本さん、小林さん、九〇才の原さん、佐藤さん、他にもやって見ようと参加していただく方々もいて、小山さん、私を加えて一〇名を超える集団になりました。

この素晴らしいサンガチームが、いつまでも継続することを切に望みつつ、皆さんの健勝を祈念して、作務の報告に代えさせていただきます。

合掌

作務の意義（上）

柏市　五十嵐　嗣郎

龍泉院参禅会員による作務が毎月第一金曜日、第二土曜日、第三金曜日の午前中に行われています。

定例の作務が始まったのは、松井さんによれば平成二一年ごろからだそうです。毎月三回の作務で徒長枝の剪定や、樹木の整形、雑草除去、トイレの清掃などが徹底的に行われます。その結果、龍泉院を初めて案内した人から、いずれも「きれいなお庭ですね」と、お褒めの言葉が発せられています。

境内の作務が始まったころは松井さんと小山さんの二人だけでしたが、近ごろは河本さんや佐藤さん、小林さん、小畑代表、岡本さん、山本さん、原さんなど、随分大勢の方が参加するようになりました。

作務の途中にはお茶の時間があり、龍泉院様がご用意して下さったお茶とお菓子をいただきながら、御老師を囲んで話の華が咲きます。

このような作務に精を出されている人を見ていると、作務をする人には「あ・い・う・え・お」という共通点を見てとることができます。

［あ］　作務している人は「あかるい」

朝八時から九時までの間に集まり、自分の持ち場に直行する人がいれば、坐禅堂で一炷の坐禅をしてから作務にかかる人もいます。

真夏の焼けつくような日も、真冬の凍てつくような日も、作務に集まった人は、どの人も「あかるく」「仲よく」「あいさつ」を交わしています。

前夜に台風などの強風が吹いて、杉の葉などが大量に散乱していても、誰一人としてイヤな顔をしません。それどころか「、思い切り掃除ができる」と、喜んでホウキを担いで境内に向かいます。

掃き掃除が終わった境内はパッと「あかるく」なります。みんなの顔もいっそう「あかるく」なります。

［い］　作務する人は「いきいき」

境内や坐禅堂を掃除する人は一生懸命に枝を整え、雑草を取り、雑巾がけをして、境内や坐禅堂をきれいにします。境内や坐禅堂をきれいにするのは、自分の心をきれいに磨くことと同じだと考え、頑張ると同時に、参禅会員や檀家さんの心がきれいに磨かれることを願って、本当に全力投球で「いきいき」と作務に励んでいるのです。

［う］　作務する人は「うきうき」

作務に従事している時の顔は、真剣そのもの。自分の一番好きなことに取り組んでいるように「うきうき」としています。

五葉松の葉を間引いたり、竹を切り出したり、トイレを掃除したりしている時の顔は、みんな「うきうき」。悲壮感や義務感、まして作務しているという傲慢さ、不遜なところはまったくありません。

何がそんなに楽しいのか。それは境内が、トイレが、坐禅堂がきれいになることは、自分の努力の結果であり、それはそのまま自分の心がきれいになって行くことに繋がっていると信じているからです。　（以下次号）

『明珠』の編集

柏市　坂牧　郁子

年に二度発行されている『明珠』は、この度、六九号になります。多くの先輩達の努力を積み重ねて引き継がれてきた長い〳〵歳月です。

現在は、岡本さん、五十嵐さん、山本聡さ

んと私、坂牧が担当、編集会議が月一度、参禅会終了後に開かれます。

岡本さんが次号の大まかな骨組みの提案をします。骨組みの検討、修正を三度ほど行う中、決定。承諾をいただいた方へ原稿を依頼します。

原稿は即座にパソコンでメール配信され、気づいた誤字、脱字、点や丸の打ち方、言い回しが適切かなどをチェックして、提出していただいた原稿から順次、同じ作業が続きます。

ある程度集まった原稿を山本さんが『明珠』の型に配置。それを紙面を考慮しながら、全員で字体、字の大小、太さ、間の取り方、仮名や漢字の置き換え、字数の関係で改行したり…。紙面を読みやすく、美しく落ち着いたものにするために推敲を重ねます。

五度ほど推敲しているうちに、紙面に原稿が埋まり、写真の位置も決まります。

一回目の印刷所から帰ってきた初稿の読み合わせを行い、再々度の誤字、脱字などのチェックをします。修正したものを印刷所へ。それを再度、確認して再び印刷所へ。

期日通りのできあがりで皆さんのお手元へお配りします。

すずしかりけり

白井市　佐藤　修平

小雪の舞う寒い朝、庫裡の裏手で紫陽花の剪定作務である。地面から冷気がじんじんと足裏に伝わる。隣で作務をしている先達が「冬雪さえてすずしかりけり」とのたもうた。

なるほど、作務は修行と得心。寒さも忘れ、作務に専念。「春は花夏ほととぎす秋は月～」の通り、四季のうつろいの中で作務は続けられる。ただ、「月」にお目にかかるのは一夜接心で眺める月となる。冬は寒気に気を使い、夏は脱水症状に注意しつつの作務である。

作務には余禄もある。一つは実益。初夏には真竹の筍。盛夏、作務を終え、汗を拭っていると御老師から夏野菜のお土産。折々にいただいた夏みかんはママレィドになり、渋柿では初めて干し柿作りに挑戦した。

二つ目は園芸技術の向上。先達の指導を受けながらの学習効果もあって、二年前から自宅の立ち木剪定は自分で行うようになった。経費節減である。

三つ目は「安らぎ」。「お茶の時間で～すっ」の御老師の呼びかけに始まる休憩。茶菓をいただきながら御老師を交え、先達の皆さんとの談笑の時間は心休まるひと時である。

作務に参加して四年になる。一年前からは典座の手伝いを始めた。今年は一年ぶり二度目の年番幹事となった。すべからく「自未得度先度他」、「三心（喜心、老心、大心）」、そして「他不是吾（他は是れ吾にあらず）」に通じるものと考えている。

こうして私の参禅会活動は六年目となる。しかし、我が妻が云う「相変わらず怒りっぽい」。はてどうしたものか。

坐禅と作務

柏市　原　司

禅では「坐禅」と「作務」は表裏一体の修行と考えている。

私が坐禅を始めたのは一九七〇年（昭和四五年）八月一日である。職場の上司に、小田急沿線の禅寺の堂頭（どうちょう）さんを紹介された。

学生時代から心の平穏を求めて坐禅をしたい念願があった。

当時、四〇過ぎだった。毎週日曜、早朝に起床、午前九時からの作務と坐禅が始まった。坐禅前の境内の清掃、本堂の屋外や廊下、欄干の水拭き。特に、寒中に行った作務が今も心に焼き付く。「作務は坐禅に付随した貴重

な行いである」ことが身に付いた。

坐禅を始める前は、禅とか坐禅という言葉を聞くと、何か神秘的な感じがして、深い学問でもしないと理解し得ないものと考えていた。しかし、坐禅を始めて一〇数年たったころから禅は日常生活そのものと考えるようになった。

朝起きて食事をする。他人と会って「お早う」と声を交わす。社会生活の悩みから本を読み、他人の助言に耳を傾ける。また、怒ったり泣いたり笑ったりする。私はこのことが坐禅の心と考えている。

しかし、いま超後期高齢となり、依然として人間の心の始末に右顧左眄している。そして、日々「感謝」の言葉を有難く受け止めている。

竹林の手入れ

松戸市　河本　健治

龍泉院の竹林は、いつ見ても素朴で、親しく感じます。それは前々より常に先輩方の手入れと間引きがあったからでしょう。

今回、「その一角の竹藪を手入れしよう」との声かけがありました。

そこは、猛り立つ群竹の内で、先の見えぬ作業でもありました。竹に詳しい小林さんの、いつも明確な誘導があり、伐採、間引き、倒れた竹の運び出し等々…。作務仲間との繰り返しの作業でした。

いつしか、そこに風通しのよい、一筋の光道が見え隠れした時は、充実感を得たものです。私は運び専門でした。汗をかきつつ、そこから見える風景に一喜一憂しました。

竹の寿命は、六～七年と聞きます。風雪に耐え、つや墨色に変貌しても、そそり立つ雄姿に驚き、重なり積もる倒竹の下にも、小宇宙があり、小さな命が右往左往する様子に立ち止まっていました。山積みされた竹の焼却では、風情ある落ち葉の焚き火とは打って変わった爆竹音や、激しい炎が静かな森を一変させていました。

このような手入れの作務でしたが、今は一見に値する竹藪となっています。一度、足を運んで見て下さい。

これからも、無理のない範囲で「身近に作務を」と思っています。

合掌

坐禅普及委員会から

半年間の活動

我孫子市　刑部　一郎

平成二九年の後半、一〇月から一二月に坐禅体験会が三回開催され、三三名の方が参加されました。

一〇月二八日　午前一〇時から午後一六時三〇分まで、開智国際大学学園祭に東葛坐禅クラブとして出張坐禅体験会を開催、二〇名が参加されました。当日は勧誘係が小雨の中、チラシを配り、校内では職員の方に声を掛けました。参加された方から「今まで坐禅をやってみたいと思っていた。できてよかった」、「ゲームで坐禅をやったが、本格的な坐禅をやってみたくて今日挑戦した。本格的な坐禅は違うなと感じた」などの感想をいただきました。

一一月一二日　東葛柏福祉会の坐禅体験会を開催、一三名が参加されました。椎名老師は「仏教とは生きることを学ぶこと、生きることを学ぶとは死を学ぶことでもある。それには自分自身を見つめることが大切。自分の心を見つめるのは坐禅が一番良い行」と話しました。参加者から「東葛柏福祉会は社会に

貢献することを目的にしており、今日は坐禅を体験し、御住職の話も伺え、今後の活動の励みにもなった。非常によかった」との感想がありました。

一二月一四日　J：COM東関東いきいきプロジェクト坐禅体験会を開催、一六名が参加されました。小畑代表が坐禅全般の説明をされ、「今日は難しいことは考えず、心と体をリラックスしていただく安心の坐禅体験入門と思って欲しい」と話しました。五十嵐副委員長の調身、調息、調心の説明の後、坐禅堂に移動し、坐禅を開始しました。

椎名老師は「仏道には修証これ一等なり」と『正法眼蔵』「弁道話」の巻の一節に基づき、口宣されました。さらに、御老師が警策を回されました。参加者から「初めての坐禅体験でした。初めに坐禅全体の説明があり、分かりやすかった。途中で眠くなるほど心地よい体験でした」との感想がありました。

◇　◇

坐禅普及委では参禅会員の定着化に向けての検討も行ってきました。そして、新しく来た人には指導委員が付き、マンツーマンで対応することとし、成道会から実施しました。

J：COMの坐禅体験会

柏市　五十嵐　嗣郎

昨夏初めの作務の時に、御老師から「J：COMの坐禅体験会がありますのでご承知おきください」と言われました。

御老師から紹介されたJ：COMの担当者と連絡を取ったところ、「J：COMの坐禅体験会は社員研修ではなく、J：COMが一般の人に坐禅体験を呼び掛けて行うものだ」とのことでした。

J：COMには「いきいきプロジェクト」という地域貢献活動があり、J：COMの視聴者のみならず一般の人も対象に、各種教室やイベントや講習会などを開催しているとのことでした。

今回の坐禅体験会もその一環として行われたものでした。何はともあれ、坐禅体験を希望する人を募ってくれるとは大変うれしいことです。

一〇月に入り、J：COMの小原氏とメールで連絡を取りながら、参加を呼び掛けるチラシや当日の運用マニュアル作成などの準備作業を進めて参りました。

また、一一月の定例参禅会の後に行われた坐禅普及委員会でも体験会の検討が行われました。

検討の結果、J：COMで坐禅体験会が放映されるということから、普段の坐禅体験会ではない御老師の口宣や警策を、今回だけお願いすることになりました。

また、TVカメラによる撮影が坐禅中の心を乱さないように、庶務係リーダーの刑部さんが撮影の「キュー出し」をすることになりました。

一二月一〇日、午前一一時五〇分には坐禅普及委員の方々が大悲殿に集合し、一二時からJ：COMの小原氏と最終打ち合わせを行い、準備万端を整え、体験者の来山を待ちました。

午後一時から坐禅体験会が始まりました。当日の内容については「六ページの坐禅普及委員会の活動」をご覧ください。坐禅体験の模様は一二月一二日午前一〇時からJ：COMのニュースで放映されました。

さらに、スマホに「ど@ろーかる」というアプリを取り込むと一週間スマホでも閲覧することができました。これからもJ：COMとのコラボを続けていきたいと思った次第です。

開智国際大学での坐禅体験会

八千代市　山本　聡

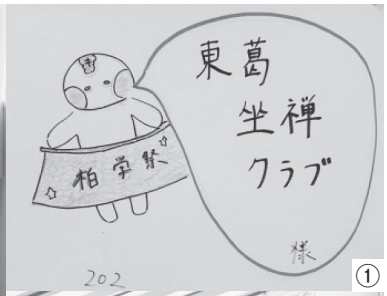
柏市内にキャンパスを構える開智国際大学の学園祭「柏学祭」に龍泉院参禅会も参加しました。教室の一室を借り、来場者に坐り方を説明し、実際に坐禅をしてもらおうというものです。

二八日は会員九名が朝九時に開智国際大学に集合し、チラシやパンフレットを並べたりして、来場者を受け入れる準備を行いました。

午前一〇時に「柏学祭」がスタートしました。生憎の天候で朝のうちの来場者の出足はイマイチ。しかし、お昼ごろになるとチラシ配りや呼び込みが功を奏してか、チラホラと体験希望者がやってくるようになりました。

大学という環境だけあって学生の若い参加者が多い体験会となりました。参加した人の多くは「坐禅を作法の通りにやってみる」という体験に喜んでくれているようでした。

学園祭といういままでにない環境での坐禅体験会でした。若い学生には坐禅作法は煙たがられるかと思いきや、逆に「所作の格調高さに感銘を受けた」という方が多いように感じました。



①

②

③

④

⑤

①実行委員会で用意していただいた控室のイラスト　②学園祭の様子；学生のライブ演奏
③椅子坐禅の体験 ④初めての坐禅に真剣に取り組む　⑤お母さんと小さな参禅者

山内動静

第三五回成道会

中興の祖、第五世幽谷和尚を語る

平成二九年一二月三日、第三五回成道会が行われました。今回は参禅会員が報恩の坐禅を二炷行った後、梅花講員と一緒に法要を行いました。参加者は三八名でした。

行事の後、問答があり、その後、御老師の法話がありました。終了後、茶話会を行い、典座役の松井さん、小山さん、佐藤さんの料理に舌鼓を打ちました。

［法話］

私はいつも名僧傑僧について話していますが、今回は龍泉院中興の祖、第五世住職幽谷機雄和尚について話したいと思います。

龍泉院は当時、この地ではなく、県道の反対側の泉村にありました。田中藩の藩主になる本多氏二代目正貫がきて龍泉院に一泊し、うるさくて眠れなかったため、この地に移すとともに、四町歩を寄進してくれました。これも幽谷和尚が偉かったからと考えられます。

現在、龍泉院には本多氏四代の御位牌があります。粗末なものなので、「大名位牌」に変えたいと考えています。

冬の暖かな日差しに包まれた法要

［問答］

問答の概要は左記のようなものでした。

刑部：死は避けて通れない。どう対処したらよいか。

答：人は刻一刻、生と死を繰り返している。対処しようというのは迷いである。懸命に生きることが生死を超える秘策であります。

加藤：宗教心とはいかなるものか。

答：考えるだけではダメ。実行するとき、宗教心が芽生えます。

杉浦：一週間に三回ケガをした。心の誤りはないのか。

答：黄信号である。ケガは体調不全の時に起こる。体調に気をつけることです。

久光：自己の身心に他己の身心を脱落せしむるもの（＝通じるもの）があると思うが。

答：現成公案に出ているが、その通りである。

小畑（節朗）：和尚百年の後は。

答：草むらにあって蛇のごとく徘徊しているだろう。

清水：「橋は流れ、水は流れず」という禅語の味わいは。

答：常識に振り回されないことだ。

五十嵐：心不可得なのに以心伝心とは。

答：命と命がぶつかった所にある。

河本：自己を感じるようになれば、四次元が感じられると言うが、イメージがわかない

答：私も分からない。三次元、四次元と振り回されることはない。

①典座寮の様子。この真剣な表情から美味しい精進料理ができあがります
②問答で御老師に問いを発する会員　③会員の問いに答える御老師

武田：自灯明を自分のものにするには何が大事か。

答：自分の力で自分を照らすことだ。武田さんはいつも自灯明で自分を照らしている。言葉にとらわれることはない。

牧野：真理を自分の手本にするには。

答：柔らかい光が差している。それ以外のなにものでもない。

山本（聡）：生死とは。

答：刻一刻と変わっている。紅葉した葉がひらひら舞い落ちる中、来年の芽が育っている。これが生死の実態である。

岡本：ヨガと坐禅の違いは。

答：坐禅の宗教性を取り払ったのがヨガである。

年末托鉢

柏市　岡本　匡房

恒例の「歳末助け合い托鉢」が東葛坐禅クラブの名前で一二月一七日午後一時から二時間、柏駅東側のコンコースの上で行われた。参加者は御老師を含め一二名。寒風吹き荒ぶ中、震えながらの托鉢修行だった。

いつものように一二時半、長全寺に集合。般若心経を唱えた後、柏駅に向かった。

とにかく寒い。「あと一時間半」、「半分を超えた」、「あと四〇分」と鈴木さんが駅の時計を見ながら報告。「もう少し」と足踏みしながら頑張るうちに時間が過ぎていった。

二時半、御老師が近づいて来られた。「寒いので中止か」とほっとしたがさにあらず。「後三〇分、皆さん大丈夫ですか」といわれたのにはがっくり。それでも、「御老師が頑張るなら」と「歳末助け合いご協力をお願いします」と一段と声のオクターブが上がった。

「J：comで体験坐禅会をみた」と言う男性が来たのでビラを渡す。「自由坐禅はいつ行うのか」と聞かれ、小畑代表幹事が「土曜日」と答えられた。さて、こられるかどうか。

三時ちょうどにピタリと終了。暖かいうどんをごちそうになった。

布施されたのは四万一五二七円。全額、朝日厚生文化事業団に寄付した。

なお、布施をされる方は「子供づれ」、「中学生くらいの二，三人づれの女子」、「高齢の男性」が多く、まったく駄目なのは

整然と柏駅へ向かう

「アベック」と「中年女性」。五十嵐さんが趣意書をつくられたので喜捨した方にお渡ししたが、受け取られた方は半分程度だった。

二人の可愛い女子中学生は五円喜捨してくれた。まさに「貧者の一灯」というべきか。

新年会、談論風発に

二月一二日（日）、恒例の龍泉院参禅会の新年会が柏駅に近い「うどん市」で行われた。御老師以下一九人が参加、談論風発の二時間半を過ごした。席上、御老師が次のような総括を語られた。

私は戌年で今年は年男。四年前、帯状疱疹をわずらって登山を断念したが、今年は再開したい。とにかく、身の回りのことを一つ一つ片づけていきたい。人間は寿命があり、「自分の無常をどう生きるか」が大切だ。高望みしてもしょうがないが、望みはもっていたい。新年会は四〇回近く行っているが、今回の皆さんの話は素晴らしい内容だった。外国人の参禅には及ばずながら出来る限りのことをしたい。

笑顔がこぼれる新年会

なお、御老師からのお年玉のアミダを行い、金賞は清水、銀賞は、松井、山川、岡本の各氏が当たった。

春思わせた涅槃会

二〇一六年、春三月を思わせる穏やかな日和の二月一五日午後二時、梅花講の御詠歌の中、涅槃会が定刻通り始まり、厳粛なうちに滞りなく円成しました。式後、御老師が次のような法話をなさいました。

雪深い地方では、一月遅れの三月に涅槃会が行われます。信仰の厚い地方では五色の団子が配られたりして、一般に浸透しています。当山では行っていますが、このあたりでは行うことは少ないようです。梅花講、参禅会の皆さんと無事、法要が務まったことは有難いことです

道元禅師に「切に思うことは為し遂げられる」というお言葉があります。いくつになっても願いはあってよいのです。

なお、参加者は御老師と梅花講六名、参禅会員一四名の合計二〇名でした。円成後、報恩の坐禅を一炷組み、今泉さんのお茶と小畑代表、龍泉院からのお菓子を賞味し、和んだ後に散会しました。

また、龍泉院から五色のお団子のお供物を頂きました。

想う事

感謝そして感謝

船橋市　高間　治基

二〇一六年三月末、娘の結婚式を大本山のお膝元に鎮座する、現代離れした格式がある神社の本殿で行った。今年二例目の結婚式ということなので、厳かなもので、巫女も初初しく内輪の式ができた。

長女の円満の相にありがたい出来事であった。また、婿殿みずからレンタカーを手配し、たって希望していた永平寺に案内してもらった。大本山では大規模な儀式（授戒会）が執り行われている最中で、荘厳な空気が立ち込めていた。本堂に向かう長い廊下の中ほどの線香箱の脇に骨太な賽銭箱が置かれていた。

儀礼に倣って私どもが左側縦一列で進むと対向してくる若い僧が合掌して過ぎ去る。無駄のない機敏な動きに感動した。

その後、あちらの世界を二度ほど垣間見てきた。それほど悪い環境ではなさそうだが、修行が足らざるを以てこちらの世界に舞い戻った。

参禅会にご無沙汰続きであるが、公共交通機関で時間通りに上山するのはかなり難しい。

時刻を勘案すると新鎌ヶ谷からの路線バスで白井工業団地まで行き、徒歩一時間ほどのコースが最も小生の身の丈にあった行程ではなかろうかと思う次第である。

杖無しで歩行できるようになった。まことにありがたく感謝に堪えない昨今である。

英語の三行詩

ポーランド　Lech Szeg
（訳）長谷川　隆

昨年四月に参禅したポーランド人のLechさんから三行詩が届きました。その時案内した漢詩吟社の長谷川隆さんが俳句に和訳しました。

zafu
the weights
of my thoughts
我が思い坐蒲受けとめし坐禅かな

zazen master -
before the wall
emptiness
坐禅の師壁に向かいて虚心なれ

zazen -
without me
the garden blooming
坐禅堂花咲く庭に私心なし

gassho
there is no barrier
for light
合掌や光明さえぎる壁なきを

sodo
just enough space
for emptiness
僧堂や虚を収めたる大宇宙

清　貧

我孫子市　清水　秀男

「貧乏な人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」

これは、二〇一二年六月、ブラジルで開催された国連主催の「持続可能な開発会議」において、前ウルグアイ第四〇代大統領ホセ・ムヒカ氏が参加一八八カ国の首脳陣に語り掛けた言葉です。

そして、世界が直面している環境問題や貧困問題をはじめ、持続可能な発展を妨げている諸問題の根源は、私たちの生き方そのものにあると警鐘を鳴らしました。

「問題の私たちの生き方とは、過度の消費主義に支配されていること。市場は人間の消費欲を満たすために、あの手この手で駆り立てる。それに甘んじてモノを購入し消費し続ければ、そのために時間を費やし、働き続けなければならない。人はカネでモノを購入しているつもりかも知れないが、人生の限られた時間を犠牲にして購入していることに気付かねばならない」

ムヒカ氏の思想は日本で大きな反響を呼

び、二〇一六年四月には訪日が実現し、東外大で「日本人は本当に幸せですか？」と題して講演し、ムヒカ哲学を披露し感銘を与えました。

ムヒカ氏の言葉がなぜ日本人の心をとらえるのでしょうか。

一つは日本人の底に流れている、物欲を抑えることによって逆に内的自由を得る清貧の考え方と通じ、響き合うものがあることがあげられます。

もう一つは、日本人自身が現在の物欲中心の生活スタイルでは幸せは得られないことに気づき、一人ひとりの考え方と社会の仕組みを変えていかなければならないという意識を持っているからではないでしょうか。

ムヒカ氏は来日して日本の印象を次の様に表現しています。

「日本は経済発展やテクノロジーの進歩は抜きん出ており、豊かで求めるものは手に届く状態にある。しかし、日本人は果たして幸せなのであろうか。仕事に没頭するあまり、人生を楽しむ時間がわずかしか残されていないのではないだろうか。また、効率や成長一辺倒の西洋よりも洗練された繊細な文化を持つ国だと思っていたのに、徹底して西洋化してしまい、繊細な文化が日本のどこに生きているのだろうか」と疑問を投げかけています。まさに日本の現状のポイントをついた発言です。

ムヒカ氏の提言と助言に今一度耳を傾け、日本古来の清貧思想にあらためて学び、大量生産＝大量消費＝大量廃棄という各人の生活スタイルにメスを入れ、真の豊かさや幸福とは何なのか、人生の Quality of Life はどうあるべきなのかなどを問い直す必要があるのではないでしょうか。

おじさん達の弔い

柏市　山川　進

最近、話題に事欠かないのが少子高齢化問題です。特に、高齢化問題について二〇二五年問題としてマスコミなどでも取り上げられています。

すべての団塊の世代（昭和二二年～二四年生まれ）の高齢者がこの時期までに七五歳以上の後期高齢者になり、その人数は六〇〇万人を超えると思われます。私も団塊の世代に含まれる一人です。

一方、社会の底辺に目を向けてみるとどうでしょうか。以前から気になっていたこともあり、先日、山谷地区の生活支援をしている特定非営利活動（ＮＰＯ）法人（代表者は元宣教師のカナダ人ジャン氏）のスタディツアーに参加してみました。

その人たちの多くは昭和三〇年代から五〇年代の日本の驚異的な経済成長を陰で支えてきた人たちでもあり、現在はどのような生活をしているのか知りたいと思っていたからです。

山谷地区に住む元日雇い労働者は現在、多くの人が簡易宿泊所に居住しており、少額の年金などで生活できないため、生活保護を受給しています。

山谷地区の生活保護受給率は八七％。他の地域と比較しても間違いなく全国で最も高い数字です。

生活保護を受給しているため、住居、食事、医療や介護などについては大抵の人は心配することはないが、身寄りのない人や親族との交流がない人がほとんどで、亡くなった後は無縁仏になってしまう人が多かったのです。

そこでＮＰＯ法人は「無縁仏となってしまう人々が入れるお墓を立てたいプロジェクト」を計画し、クラウドファウンディングで資金を全額調達しました。近くのある宗派に

相談してお墓を設置することが出来ました。
おじさん達（山谷地区に住む日雇い労働者は九九％が男性）は今では無縁仏にならず、仲間とずっと一緒に元労働者たちの墓に眠ることができるようになりました。

『正法眼蔵』二回目の浄写を終えて

流山市　久光　守之

一者小欲、二者知足と『正法眼蔵』「八大人覚」の巻を浄写させていただき、全九五巻の二回目の浄写を完成させました。
思い起こせば、二一年前、参禅会に入会した時、御老師の『正法眼蔵』の講義を受講し、難解のあまり、書店にて『正法眼蔵全講』（岸澤惟安師議義）を購入し、浄写することとし、約一〇年前浄写を終えました。
それは、私が墓の中に持参することとし、その意を参禅会で発表した時のことです。小畑代表幹事より、「参禅会に納入した方がよいのでは」との話がありました。愚考した後、再度浄写し、一巻ずつ納入することを決心し、御老師の手元に納めさせていただきました。
昨年一二月、全九五巻を謹書納入できましたことは、諸仏諸祖、御老師の励ましの賜と深く感謝し、また、新たに三回目の浄写を始めました。
三五年前、仏縁により、『般若心経』の写経を始めた時、願い事として「小欲知足」と記入したことを鮮明に記憶しております。
いま、この「八大人覚」の中で「小欲」、「知足」と書くとは「縁従仏種起」と「諸悪莫作」の巻にあります通りで、ただ、感謝するのみです。
「いまをしふる功夫弁道は、證上に万法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり」は新たに始めた『弁道話』の好きな一節です。
私にとりましては、『般若心経』と『観音経』の浄写と、坐禅即自受用三昧が、一日一日の初めと終わりであり、生命の初めと終わりであります。
おそらく、三回目の浄写は、全巻書き終えることはできないと思いますが、「生死の間に弁道があるのではなく、弁道の中に生死あり」と「行持」の巻にある通りです。また、次世にて浄写する所存です。
生死は生死に任せ、道にお任せして、いまは「自陀無し」を目指して、弁道、浄写させていただきます。なにとぞ、御老師、代表幹事をはじめ、皆様のご支援をお願い申し上げます。

無垢、無邪気、無心、無防備
笑顔とは
無から生まれるものと思えり（俵万智）

息子と私の坐禅挑戦

流山市　市川　信彦、洋介

昨年六月から龍泉院にお邪魔するようになりました。参加するのは息子と私の二人です。
息子は高校二年の途中から高校に通えなくなりました。
そこに至った本当の理由は分かりません。でも、きっと彼にとっては耐えがたい、辛い思いがあったのだと思います。
結局、通っていた高校は辞めて、暫く家で過ごす時期を経た後に、フリースクールに少しずつ通うことになりました。
何とか息子に前向きになって行くきっかけを見つけられないかと思っていた中、以前から私自身が興味のあった坐禅はどうだろうかと思い立ちました。
以前、私自身も總持寺で一度だけ体験坐禅をしたことがありました。そこで、坐禅出来るお寺をネットで調べてみると、意外に近いところに見つけることが出来ました。そこがこちら龍泉院でした。息子が興味を持つかどうか

分かりませんでしたが、一緒に行かないか誘ったところ思いがけず行ってみたいとのこと。

それから、月例参禅会には二人で欠かさず参加し、十二月の成道会にも参加させていただきました。

今では、毎朝少しずつですが、彼は家で欠かさず坐禅をしています。私は全然出来ていませんが…

おかげ様で少しずつ落ち着きと前向きな気持ちも出てきた気がします。

最近では大学に行きたいと話しています。

これからは進路のことも親からは無理強いすることなく、本人が本当に進みたい道が見つかれば応援したいと思っています。

このように前向きに少しずつでも進み始められたのも御老師はじめ参禅会の皆様が暖かく迎えて下さり、ご指導いただけているからと感謝しております。まだ、右も左もわからない二人ですが、宜しければこれからもお寺に通わせて頂ければと思います。

〝絹のひと〟高野千代子さん

柏市　杉浦　上太郎

会友の高野千代子さんが平成二九年、九一歳で逝去されました。同年九月二一日、小畑代表幹事、松井隆さんとご子息宅へ弔問に伺いました。

高野千代子さんは「本当に大好きな人」です。小生が参禅会にご縁をいただいたのが、昭和六〇年、四二歳の時で、当時、高野さんは、二年先輩で五九歳でした。小畑節朗さんと『明珠』の編集委員をされていました。

毎月の参禅会後の茶話会で談話をするときの高野さんの印象は、きれいなお顔立ちと和やかな表情、涼しげな声と上品な話し方から、まるで絹のような人だと思ったのを今でも覚えています。

平成四年四月発行の『明珠』一五号から、その編集を高野さんから小生が引き継ぐことになり、種々ご指導をいただきました。

編集委員を引き受けたことを後から、小畑さん、高野さんご両所が育まれてこられた品位を失しないかと大いに後悔したものです。

本追悼文を記すにあたり、高野さんが『明珠』に執筆された一三回の文章をすべて読み返してみました。中でも次の二稿は、多大な労力と卓抜した編集センスによります。

八号（昭和六三年一〇月五日）／「天地法界の風光」は、同年六月に一夜接心でお世話になった大雄山大乗寺において、同山山首、余語翠巌老師から賜った法話を五ページにまとめたものです。

一二号（平成二年一二月八日）別冊／『教主釈尊―その悲・智・慈―』は、同年六月に一夜接心で訪問した常眞寺の住職、皆川廣義老師の法話を一四ページにまとめたものです。

高野さんは昭和元年生れ。平成一五年一二月の成道会において参禅二〇年の記念として、椎名老師より書額が贈呈されました。それに因んだ感謝の寄稿文に、わき目もふらずひた走った現役時代、退職後参禅会に縁を得たこと、一人で生きることの空しさなどが綴られ、今後は参禅二〇年のご縁にすがって〝あるがままに生きる〟と結ばれていた」。

高野さんは女性警察官の草分け的なキャリアウーマンであったにも関わらず、そのような話も、偉そうな語り口も、露ほどにもみせたことはありませんでした。

私も今後、高野さんを見習って〝絹〟のように生きていきたいと強く願っております。

高野さんのご冥福を祈願して、皆様に『明珠』に埋蔵されている高野さんの珠玉の言葉に触れてくださることをお勧めいたします。

（合掌）

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】
（　）内は座談の司会者

平成二九年

●九月二四日　三三名
（河本　健治氏）
●一〇月二二日　一二五名
（杉浦　上太郎氏）
●一一月二六日　三二名
（小畑　二郎氏）
●一二月三日　三一名
成道会
幹事　小畑　節朗氏
松井　隆氏
山桐　照夫氏
●一二月一七日　一二名
歳末助け合い托鉢
●一二月二四日　三六名
（鈴木　民雄氏）

平成三〇年

●一月二八日　三〇名
（相澤　善彦氏）
●二月一一日　一九名
新年会
●二月一五日　一三名
涅槃会
●二月二五日　三五名
（小林　祐次氏）

【自由参禅】
九月　三日（八名）、九日（七名）
一〇月　一日（一一名）、一四日（七名）
一一月　五日（九名）、一一日（八名）
一二月　九日（七名）
一月　七日（八名）、一三日（一〇名）
二月　四日（一二名）、一〇日（八名）
一五日（八名）
一月　五日（五名）、一三日（五名）
一九日（七名）
二月一〇日（八名）、一六日（五名）

【坐禅普及委員会】
九月二四日（九名）
一〇月二二日（一一名）
一一月二六日（一二名）
二月二五日（一四名）

▼新年早々に例年開かれる「現代書道二十人展」に出掛けてきました。江口大象先生の作品の前で釘づけ。太文字の横書「自未得度先度他」。じっと見つめていると、椎名御老師の門前の告諭が浮かんできました。暖かい優しさを感じる太い線です。極められた人の書かれる線と思いました。（坂牧）

▼過日、団地の夜回りに行きました。拍子木を叩き「火の用心」というだけです。「ありがとう」という人もいますが「うるさい」という人もいるのことです（私の時にはいませんでした。さて、生き様とは。（救濟）

▼動物園のチンパンジーと仲良くなりました。彼は私に気づくと近づいてきます。わたしが手拍子でリズムを刻むと、踊るように体を動かしたり地面を叩いて合わせてきます。ときどき、この異類の友達を訪問してリズムセッションをしています。（智聰）

●発行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04（7191）1609
●印刷／東港出版印刷株式会社　目黒区中目黒1―8―8　☎03（5724）7302

龍泉院参禅会簡介

【参　禅】
一、定例参禅会
・日　時　毎月第四日曜九時（初参加者は八時半）来山、正午解散
・坐　禅　口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）
・講　義　木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
・座　談　自己紹介・喫茶・座談
一、自由参禅
・日　時　毎月第一日曜と第二土曜九時から正午まで
・坐　禅　九時から一一時まで（入退堂自由）
・作　務　一一時から正午まで坐禅堂掃除
※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】
一、一夜接心　本年は六月二～三日、一泊し七炷の坐禅と提唱等
一、成道会　本年は一二月二日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
一、他の行事　涅槃会（二月一五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）手伝い、歳末煤払い（一二月例会後）
毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
一、作　務

【会報誌】
一、『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）
一、『口宣』（年一回）
〔ウェブサイト　http://www.ryusenin.org/〕『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます